

個人住宅の自力建設手法及びその補助職能の研究／実践

開放系技術に基づく建築作品「世田谷村計画」「渡辺邸新築計画」を中心として

代表 石山修武（早稲田大学理工学部建築学科 教授）

委員 松本康弘（早稲田大学理工学部建築学科 講師）

委員 森川英治（早稲田大学理工学部建築学科 助手）

研究報告要旨

開放系技術とは、パーソナルコンピュータによるインターネット利用などを代表とする個人で取得できる情報・技術を道具として使用する、ブリコラージュである。コンピュータの個人レベルへの普及は、一方的であった情報の流れの在り方を変え、情報の選択の幅を広げることで双方向性が生まれ、消費者として供給される側、売りつける対象としてだけ見られていた大衆に、モノをつくる側への消費的性格からの参加を可能とした。情報の選択、あるいは直接的なコンタクトはすでに従来の消費的性格を超え、情報空間をつくるという域に達し始めている。すでに身体（意識）の周りには、極めて個別な、つまりそれを自由と呼ぶのだが、空間の発芽がある。それらの状況は、ウィリアム・モリスの目指した世界を解体しながら、再構築する可能性を示す。レヴィ＝ストロースのブリコラージュ、つまり手作りする人の道具とモノ（素材）をコンピュータは驚異的に増大させ、手作りする人の能力に、内的な革命をおこすことが可能だ。モダニズム（近代建築）は観念的な普遍を目指した。今日ではそれは形骸化した形式になった。コンピュータの普遍化を中心とし、様々な情報と技術を共有して、個別の条件により個別に対応した建築を開放系技術は目指す。その入口は、モダニズムの枠の外にあったマイノリティーのための建築であり、さらにそれは新たに個人個人の生産活動を豊かなものにし、生活者が主体となる自ら作りあげる生活の場を提供しうる。

上記の開放系技術の考え方を実践するものとして、オープンテックハウスと呼ぶ一連の住宅の建築を行っている。同時に関わる様々な生活のための道具をオープンテックプロダクトとして提案した。02年度までに実現した2つの建築の事例「世田谷村計画」「渡辺邸新築計画」を元にこれらの考え方を示していく。建築の各部位に様々な手法を取り入れている。具体的には情報の収集、製品の製作や流通、建築現場、コスト、デザインなどのあらゆる段階で、建築するものがそれをコントロールできる事を目指している。